

ひろつちよ
弘津千代

柳井市
(1901～1983)



【著作】

『戯曲華子城物語』（山原たづ著 大正11・新光社）
『新児童劇集』（児童劇研究會 昭和20・日本學藝社）

【閲覧情報】

柳井市立柳井図書館「弘津千代コーナー」
☎0820-22-0628

【作品一覧】

（年譜掲載作品他数編を除く）

- ・戯曲
「華子城物語」（大正11）
「女敵異聞」（大正・15）
「絵島流謫秘話」（昭和3）
「寿門松」（近松原作・脚色・昭和10）
「周防般若寺縁起」（昭和8）
「老菊物語」（昭和14）他
- ・歴史小説
「歌舞伎の美・悪の美」（大正15）
「妹背山漫筆」（昭和16）他
- ・評論

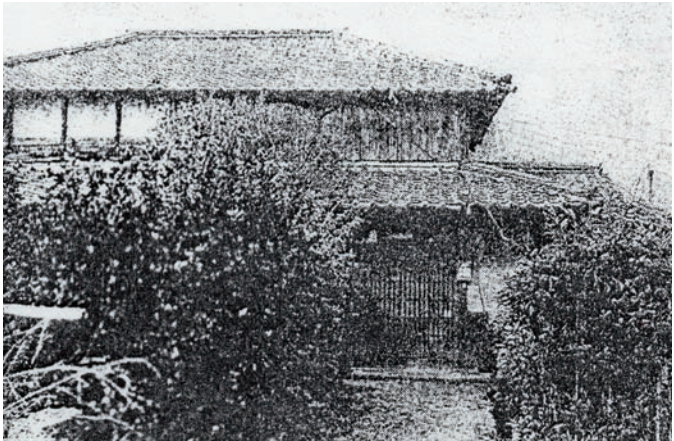
（文・村上省吾）

劇作家の名は他のジャンルに比し、一般になじみが薄い。弘津千代（本名チヨ）もその一人だが、大正末期から昭和戦前の約十五年間、劇作家として華々しい活躍をし、山口県では数少ない劇作家として、忘れてはならない存在である。

千代の郷里は柳井市伊保庄であり、生家もあったが、劇作家としての活動の中心は東京で、日本女子大在学中から劇作家中村吉蔵に師事し、劇作に専念。大正十四年（一九二五）には「吉田御殿」（原題「天樹院」）が帝国劇場で上演されるなどした。

千代の作家的地位を確立した作品は「妖鱗草紙」で、昭和九年（一九三四）「蛇性の姪」と改題し、戦後も再三上演された。八十二歳で没するまで、三十編にも及ぶ戯曲、評論、十三編の歴史小説等を残している。

千代の戯曲は歴史上の人物に題材をとったものが多く、評論の多くも歌舞伎や役者に関するものである。作品は、男尊女卑を美徳とした当時の日本の生活様式に、強い抵抗を感じ、その主張を舞台を借りて表出したものが多い。生涯、独身を通した。



解体前の生家



生家跡碑（柳井市）

弘津千代 年譜

（提供・弘津友三郎、村上省吾）

（前略）

明石 そなた、灯を入れて了うたら、早う燈臺^{あかし}を持つて参る様にいふてくりやれ。

侍女一 はい、かしこまりました。（と最後の燈籠に灯を入れて下手に去る）

明石 （獨り言の如く）ほんに上様の御氣まぐれにも……御胸中を察し申せば御無理もないたはしい事乍ら困つたものぢやのう。

竹尾 （暫く躊躇した後）でも、此宵は殊の外の御機嫌でいらせられる様でござりまするが

明石 いや、その御機嫌のよい後がきまつた様にきつい御不興ぢや。粗相のない様に氣を付けねばなりませぬぞ。

竹尾 はい。

明石 それにしても氣にかゝるは繁之丞様あんまり遅いは、こりやもしや、上様のひよんな噂が表向きに……

（この時上手よりはるかに子供数人の聲にて
「吉田通れば二階からまねて、しかも鹿の子の振り袖が」と唄ふ聲聞ゆ）。

明石 いまいましい歌がはやるよのう。

（明石暫く上手をみて不快な表情をする。竹尾もじつと上手を見て思ひ入れ）

明石 あ、いや、人の噂も七十五日とやら。町家の者さへ御入れ遊ばさねば、噂も自づと消江るであらう。御殿の内みの事ならば、どの様にでも隠される。（後略）

一幕劇「天樹院」（『舞台評論』大正14年7月号より）

明治34（一九〇二）年	二歳
明治36（一九〇三）年	六歳
明治40（一九〇七）年	二歳
大正2（一九一三）年	二歳
大正6（一九一七）年	一六歳
大正7（一九一八）年	一七歳
大正11（一九二二）年	二一歳
大正14（一九二五）年	二四歳
昭和2（一九二七）年	二六歳
昭和4（一九二九）年	二八歳
昭和6（一九三二）年	三〇歳
昭和9（一九三四）年	三三歳
昭和12（一九三七）年	三六歳
昭和15（一九四〇）年	三九歳
昭和18（一九四三）年	四二歳
昭和19（一九四四）年	四三歳
昭和23（一九四八）年	四七歳
昭和30（一九五五）年	五四歳
昭和43（一九六八）年	六七歳
昭和58（一九八三）年	八二歳

1月5日、山口県熊毛郡伊保庄村（現・柳井市）に、婿養子である父完介（旧姓角井）と母マツの長女として生まれる。

母マツ逝去。祖母ツルに育てられる。小学校入学までは郷里で過ごす。転居により、広島の小学校へ転入。

県立広島高等学校に入学。

同女学校を卒業し、郷里で1年間過ごす。

日本女子大学国文学科入学。

同大学卒業。社団法人桜楓会家庭月報編集部役員となる。また文学博士中村吉蔵氏に師事し、劇作に励む。

9月、帝国劇場において戯曲「吉田御殿」（「天樹院改題」）初演。

「清盛と常盤」「加賀の千代」「忠信の恋人」等の戯曲を発表。

4月、駒澤大学教授・文学博士林屋友次郎氏の研究助手となる。戯曲「野村望東尼」「利休の死」を発表。

雑誌「令女界」に歴史小説掲載開始（昭和14年まで）。

創作「ガーネットの指輪」を発表。

「万治高尾」が南座で、「当世花嫁風景」が歌舞伎座で上演される。

「妖鱗草紙」が宝塚劇場、新橋演舞場で上演される。

「或る女」（有島武郎作・脚色）が築地小劇場で上演。

戯曲「般若姫物語」「籤」「にわとり娘」を発表。

7月、林屋友次郎氏の研究助手を退職し、日本教育画劇株式会社編集部長となる。

6月、日本教育画劇株式会社を退職し、郷里伊保庄に疎開する。

伊保庄中、室積中、柳井中で教師生活。

上京し、東京で文筆活動をする。

12月、病を得て、実弟で養子の、京都市立芸大教授の弘津（旧姓角井）友三郎方に身を寄せる。

入院生活の後、7月、死去。

墓は生家に近い上八追猿北側の小高い丘の上にある。

生家跡に碑が建立される。